

審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	甲 第 1341 号	氏名	猿渡 力也
審 査 担 当 者	主 査	赤木 由人	(印)
	副主査	猿渡 浩	(印)
	副主査	戸木 照之	(印)
主論文題目 : Risk factors for surgical site infection in spinal surgery and interventions: a retrospective study(和訳 脊椎手術および介入における手術部位感染の危険因子：後ろ向き研究)			

審査結果の要旨（意見）

Saruwatari らの研究は、脊椎手術後に発生した SSI の危険因子を後方視的に検討した臨床研究である。対象となる症例は 1000 例と多数で、術中・術後の管理については統一された中で検討してる。しかしながらイベントである SSI 発生が 2%と低率であったこと、手術侵襲の違いを考慮することが困難なこと、1 日臥床時間の比較、栄養状態が考慮されていなかったことなどいくつかの問題点がある。しかしながら術後離床までの期間が SSI 発生にかかわる危険因子の 1 つであることが示唆された。より早期の離床を進めるための方策をどのようにするかが課題である。実臨床においては様々な因子が重なり合って思わぬ結果を生じることがあるので、細やかな視野での管理が必要なことを警鐘する研究である。

論文要旨

当院において、2015 年 9 月以前に MRSA を起因菌とした脊椎 SSI の発生が多発したため、2016 年 4 月から 2019 年 3 月までに施行した脊椎手術 1000 症例を対象とし、SSI の有無をイベントとし、患者因子、手術関連因子、術後因子における SSI リスク因子において調査を行った。脊椎 SSI リスク因子としては、患者因子として、認知症、手術までの在院日数（ ≥ 14 日）、手術時診断名（外傷及び変形疾患）が、手術関連因子として多椎間手術（ ≥ 9 椎間）が、術後因子では離床までの期間（ ≥ 7 日）で統計的有意差が認められた。本研究の介入可能なリスク因子としては、離床期間があげられる。離床の遅れが術後 SSI のリスク因子となることが明らかになり、今後術後の離床に対して医療側がどのように介入していくかが、SSI の発生をさらに低下させるための課題となる。